

加藤景範編『和歌実践集』の成立

三 村 晃 功

一 はじめに

筆者はこれまで中世に成立した私撰集および類題集を中心にして研究を進めてきたが、しかし、成立時期が近世であっても、それが室町時代までの詠歌、つまり古典和歌を主要内容とする類題集である場合には、それも研究対象に選んで検討を加え、撰者未詳の『明題和歌全集』や後水尾院撰『類題和歌集』、さらに靈元院撰『新類題和歌集』などに関する論考を公表してきたのであった。

ところで、これらの類題集はいずれも形態的には真名による結題を歌題とする種類のものであったが、近時公表した「高井八穂編『古詩類題和歌集』の成立」(『仏教文学とその周辺』平成一〇・五、和泉書院)や、「石津亮澄編『屏風絵題和歌集』の成立」(『光華日本文学』第六号、平成一〇・七)、さらに「聴雨庵蓮阿編『仮名類題和歌集』の成立」(『中世文学研究』第二十五号、平成一一・八)などの論考は、仮名題によって編纂された形態の類題集を対象にして、その編纂目的、特質、位相などに言及した論考であった。

1 このような次第で、仮名題による類題集の研究は、まさに緒についたばかりの現況にあると言わねばなるまいが、

このたび研究対象に選んだ加藤景範編『和歌実践集』も、これらの仮名題による類題集の延長線上に位置する類題集であって、類題和歌集の研究上、どうしても避けては通れない種類の類題集である。

ちなみに、本集は福井久蔵氏の『大日本歌書総覧 上巻』（昭和四九・五、国書刊行会）には「和歌実践集 一卷 加藤景範ノ二十一代集より詞書の歌を抜き、四季恋雑に分ち、終に詞書の心得を載す。寛政七年に成る。上木」と紹介され、また、『和歌大辞典』（昭和六一・三、明治書院）には「和歌実践集^{わかじつせんしふ}（江戸期私撰集）加藤景範編。序があり、その終わりに詞書の心得について付録がある。成立は寛政七（一七五）年七月。五卷一冊。二十一代集より詞書のある歌を選び、四季・雑・恋・賀・哀傷・離別・羈旅などに分類して、各歌にそれぞれ集付・作者名が記されている。（針原孝之）」と紹介されているが、その詳細な具体的内容についてはまったく言及されていない現況にある。

したがって、以下の論述は、以上のような現況下にあって、例よつての蕪雑な作業報告の域を出ない代物ではあるが、従来、事典類以外にはまったく言及されることのなかった『和歌実践集』について、この類題集がいかなる編纂目的で製作され、いかなる特質を有し、これまでの類題集といかなる点で異なり、近世類題集の系譜のなかでいかなる位相にあるのか等々について、おおよその検討を加えたものである。大方の厳しいご批正を賜らば、幸甚に思う次第である。

二 書誌的概要

さて、『和歌実践集』の伝本については、『私撰集伝本書目』（昭和五〇・一一、明治書院）によると、寛政七年刊行の版本が刈谷市中央図書館・国会図書館・新潟県立図書館・宮内庁書陵部などに数本伝存するのみである。そこで、

ここでは刈谷市中央図書館蔵の該本を、国文学研究資料館蔵のマイクロ・フィルムによって紹介するならば、おおよそ次のとおりである。

国文学研究資料館蔵のマイクロ・フィルム 30・246/2、C6478

所蔵者 刈谷市中央図書館村上文庫 蔵(1805・5・3甲五)

編著者 加藤 景範

体裁 大本(縦二六・一センチ、横一七・六センチ)五冊 版本 袋綴

題 籤 和歌実践集 一(一五)

内 題 実践和歌集 卷之一(一五)

目録題 実践和歌集 卷之一(一五)

匡 郭 短郭 縦二〇・七センチ、横一三・八センチ

各半葉 十二行(歌一行書き) 序半葉八行 凡例半葉十一行 付録半葉十二行

総丁数 二百三十丁(第一冊五十六丁、第二冊五十丁、第三冊五十四丁、第四冊二十六丁、第五冊四十四丁)

印 記 村上図書(方形)

柱 刻 実践集序 実践集凡例 実践集目録・目一(一) 立春 子日 実践集春・一(一五二)(以上卷

一) 一) 実践集 疾病・一(一) 実践集・大尾)

序 有(加藤景範 寛政辛亥(三年)の春)

刊 記 有(寛政七年乙卯七月発行 浪華書肆 岩崎徳左衛門/加藤源蔵/加藤清右衛門)

総歌数 二千三百五十九首(巻一・五百八十八首、巻二・五百十八首、巻三・五百五十七首、巻四・二百七十

五首、卷五・四百二十一首)

以上から、本集は江戸中期ごろに版本によって流布した、二千三百五十九首を収載するやや大規模の類題集であつたと言ふことができようか。以下、本集の内容について具体的に論述していきたいと思ふ。

三 歌題の問題

さて、『和歌実践集』の書誌的概要については以上のとおりだが、本集の内容はいかなるものであろうか。この点の理解のために、卷一の冒頭一丁分の記述を以下に引用してみよう。

実践和歌集 卷之一

春

古今 春立ける日よめる

立春

袖ひちて結びし水の氷れるを春立けふの風やとくらむ

紀貫之

後拾 正月一日よみ侍りける

いかにねておくる朝にいふことぞ昨日をこぞとけふをことしと

小大君

同 みちのくに侍りける時、春立日よみはべりける

出て見よ今は霞も立ぬらん春はこれより過とこそきけ

光朝法し母

新勅 題しらず

命ありてあひみん事も定めなく思ひし春になりけるかな

殷富門院大輔

風雅 山里に住侍りける比

みるまゝに軒ばの山ぞ霞みゆく心にしらぬ春や来ぬらむ

永福門院内侍

この春部の冒頭の記述内容をみると、まず集付(出典注記)がきて、ついで詞書が続き、次に改行して、詞書より二字下げで勅撰集からの抄出歌(証歌)がくるといふ体裁になっていることが知られるが、さらにこの五首の歌群には「立春」なる、いわばこの歌群を統括する要約的な歌題が付せられている。この『和歌実践集』の記述方法は従来の類題集のそれと比べて、少々異なっているようだ。ここには出典注記と詞書が証歌よりも優位に立っていることが構造的に示されていると言えようが、換言すれば、この叙述方法にこそ本集の属性が示唆されているとも、逆に言えそうである。すなわち、ここには本集が勅撰集の詞書による類題集であるという性格を如実に見て取れようが、この性格こそが本集の本集たる所以となっている。そこで、以下には、本集の詞書が歌題としてどのような要約、凝縮されて表示されているかを見ることをとおして、本集の歌題的側面に具体的に言及していこう。

春部

立春・子日・霞・鶯・若菜・春雪・梅・桜・糸桜・落花・残花・畑やき・呼小鳥・桃・堇・蛙・款冬・藤・暮春・閏三月

夏部

首夏・余花・新樹・郭公・早苗・菖浦・薬玉・忍び男を夏の月にたとふ・橘・瞿麦・夏月・雷・ひぐらし・晩夏

秋部

初秋・七夕・ひぐらし・秋花・虫・稲妻・鹿・秋興・秋夜・月・鴈・鶉・鳴・霧・菊・紅葉・暮秋

(以上、卷一)

冬部

初冬景趣・時雨・落葉・冬鹿・千鳥・水鳥・冬月・雪・炭がま・雑・歳暮

雜四季部

春・夏・秋・冬・公事・官職・人倫・和歌・書（文をやりたがふ・文をかへす・草しをかく・物かゝぬ草し・文をやりて返す・文のかへしせぬ・むすめに草〔子〕を書いてやる・人の父の書る集をかりてかへす・物語の奥に書・草しの奥に書・故人の書・古今集を書・前朝の御手本を奉る・故人の書に書添る・代筆にて歌を書出す・返歌を書なやむ・御製を給はりしおおくにかき給ふ・求る主をしらで手本を書く）・絵（滝・花・鴈・川べに紅葉を見る・さび江・鳥・地獄・人の山寺に入・小たかゞり・稲をはこぶ・旅人紅葉の陰ゆく・法師死者をみる・なでしこ・七夕に女の水あみたる・松に藤・とこなつ・竹道の花・梅ある家を人とふ・渡りに時鳥を聞・盗にあふ・松根泉・綱引・花の下に人々あつまる・たなばた祭・泉・水上月・冬野やく・七夕に琴ひく・僧の舟にのる・長柄橋柱・梅をとふ・山里の花・旅人の花みる・山里の紅葉・山郷の雪をとふ人有・山里の雪・老翁松鶴を伴ふ・梅の下水・桃花・長恨歌・車をとめて紅葉をみる・鷹人菊ある家にやどる・物語合・影像・山下に琴ひく・落花・藤花・紅葉・女の身なげんとする・花ある家をとふ・影像）・居所（河原院・家をうる・別荘へ久しくゆかぬ・庭のおもしろき・山居・庭の滝・河原院・松・旅館の滝・大覚寺の滝・庭の景難波ににたり・山居をとはるゝ・法しの山住とぐまじき・山居をとはるゝ・旧居の松・家をうる・山居ひさしくしがたし・岩屋・山家月・山郷より都へいひやる・山家へいひやる・山居をとはるゝ・山居・山居の嵐・仙居・古寺月・山居を思ひやる・山居・山居をとふ・故郷・山居・滝殿の跡・山居・算かねて山居の所を定む）・問尋（旅居間・友のとはぬを恨む・越なる人を問・近く住て消息せぬ・人をとふてあはず・網代をとふ・とはぬを恨む・とはるゝをよるこぶ・門過てとはぬをうらむ・とはぬを恨む・問し人の早くかへる・甲斐なる人とふ・尋る人にあはず・とはぬを恨

るにこたふ・旅立人をとふてあはず・山居をとふ・友を問て別れをおしむ・疎さを恨む・故人をとふにあはず・雪中に小野をとふ・東より都の人へやる・閑居をとはれぬ・遠境の人を思ふ・約してとはぬ・山僧を問しにあはず・とひし人の帰さをいそぐ・山籠りをとふ・山籠りをとはぬ・人の歎をとふ・ゆかりに疎き・とひし後又とはぬを恨・とはぬを恨み只よろこびをいふ・山入るをとふて世をなげく・梅咲家の主を問にこたへぬ

(以上、卷二)

恋部

賀部

年賀・うぶや・児を祝ふ・雑賀

哀傷部

(以上、卷三)

離別部

物語してかへる・近江へ・越路へ・越へ・住吉へ・下野・信濃・故郷へいそぐに物をやる・美濃へ・陸奥へ・伊勢へ・汚名を取て他国へ行・別後の歎き・みちの国へ・扇をやる・装束を贈る・浮島の松によする・子のながさる・武隅松・月下の別・信濃へ・友の旅るせるかたへ行人に・筑紫へ・かうやくををくる・熊野へ行・別後都の秋を思ふ・旅立人を問てあはず・筑しにて親しくせし人にいひやる・出雲へ・物を贈る・旅宿をたつとてあるじにいふ・老の別・年の暮にわかる・津国へ行といひて猶都に在人へ・国司に成て国へ行ををくる・いせへ行・陸奥へ・加賀へ・日向へ・旅宿の主によりてやる・渡唐・止宿せし方より帰る・つくしへ・東路へ・旅宿の別・宇佐使・九月尽の別・筑前守大二の別を惜む・子の入唐・頼めし程へてかへらず・衣を贈る・みちのくへ・つくしへ行に扇をたまふ・入唐・陸奥・都うつし・みちのくへ・退朝の別に御製を賜ふ・備中へ・伴はんの約た

がふ・父の命にて遠国へ行人に・雨にて旅立とゞまる・世をのがるゝとて友にをくる・東へ下る人に・扇を贈る・備中へ・越路・難波にて人にわかる・旅立跡の事をいひ置・信濃へ・入唐の舟出・旅にて契りし女のわれ・川尻にての別・十月の別・君の祈り衆人にまさる

羈旅〔部〕

遠国より帰りて音せぬ・旅にて人を思ふ・海の波・舟路・住吉へ・旅より帰る所・前斎宮伊勢に下り給ふ・みたけへ上る・行時休みし宿に帰りにもこんといふ・月みる・姨捨の月・堀江・旅なる人にいひやる・東国の任果て西国へ下る・霧に旅立・吹上浜・信濃のみさか・しがすか・象がた・かへる波を・塩やくを・月をみる・年の暮に上洛の舟出す・老て二たび筑前へ下る・同行去て独山居す・旅居の人に帰京をいそがす・遠人を思ふ・月をみる・帰洛をとゞめらる・伊勢忘井にて・海路の月・旅ねに終の宿りを思ふ・敷津に泊す・船中夕立・わかの松原・もろこしにて・明石のと・つくしより上る・同行にはなれて我行かたをあまにいひ置・寒さに爪木をいそぐ・十五夜故郷へいひやる・宿をかさぬ・浅香山・つくばね・やすの川・まがきの島・多武峰より京に出る・滝・橋・関・さやの中山

雑部

(以上、卷四)

疾病(病中に花をみる・病たいらぎてとへる人に・病をとほで門過るをうらむ・病を、そくとへるに・病をこたりてとふ・病をとふ・今はの御歌なるべし・病をとふにこたふ・病を問を謝す・病をとへるに・師の病をうれふ・病を奏せしにたまふ・病をとほぬにいひやる・乳母の病をとふ・病中に門前の車の音を聞てなく・祈の印の賞を給ふ御謝)・懐旧(もとみし人のなく成し宿・昔をこふる・柿本墓)・述懐(盛衰に心なし・御遊にあふよろこび)・僧道(経供養の帰りに花をみる・修行に出る・山居とぐまじきといふに答ふ・僧の色好・僧の扇をお

とせる・仏道に入・尼になれるに・法師に成て宮中をとふ・神に詣て仏にまいる・涅槃会・亀井・涅槃・菊によする釈教・修行しておとろふる・山居の僧にいひやる・子の為に願ふ琴ならず・入道せしに法服を贈る・山路にて遁世を思ふ・山居の人京へ出たるに・遁世する人へ・男の遁世せんといふを恨む・雨を祈てしるし有・一流法義・ひえの山への勅使・世をのがれんとするを人のとはぬ・法流・さかの往生院・万燈会・仏滅日・御願寺）・衣服（かりたる衣をかへす・染ぬ絹ををくる・袈裟・かづけ物・うらなきひたたれを乞・旅宿女に契て帰る時、絹をやる・父の年賀に唐衣をくれるに・ぬぎ置し衣をとりやる・古衣・僧衣をからんといふ・旅にて女に絹ををくる・旅立に衣を贈・かしたる帯を其末、をくる・摺袴をみしといそぐに・人の袖のほころびをみて・かづけ物・蓑をかるに山吹をみず・衣をかりてかへさぬに・小袖を贈る・法衣を、くる・深紅の色をとがめんとせし・雨に衣のぬれければ、唐衣をたまふ・法服を贈る・盗にあひし明日、人より衣を贈）・飲食（草積へトコロ）ほるを・石葦・みる・もちるかゞみ・おほみき・かざりちまき）・器物（琴・琵琶・笛・弓・太刀・鏡・扇・杖・杯・文台・碁・櫛・綾へオイカケ）・襪（シタウツ）・鞆・下くら・数珠・独鈷・錫杖・鐘・鍋・日打・車・舟）・雑物（薰物・造花・文机の石）・草木（松・松たけ・杉・桂・檜・紅葉のをそきと桜のかへり花と・忘草・朝顔・とくさ）・鳥獣虫（鶴・鶯・郭公・都鳥・白鳥・牛・鹿・まで・蜘蛛・ひぐらし・ひる）・雑草（形みにくき・ぬれぎぬをほす・なき名立・白髪の水に影みる・はら立る人にいひやる・人のみしる・とがめ有て里にこもる・忍びて逢をみあらはす・人の恨みのとけがたき・つらき男の姉へ其うさを告しに、げにうからんといへるをよろこぶ・めなきをわらふに・男のみにくきを、人にはづるに・女のつどへる簾内へ男歌をいひ入る・五節の青摺の紐とけたるを結ばんとしての贈答・忍びありきを見あらはす・西行の山を出られしに・吉凶同時・童を思ふ・久しくとはぬをうらむ・述懐・奏せし事の宣旨のをそき・領地に付て訟へし事、願ひのま、にな

る・盗を捕へて賞あり・歌うたふ人の声のかれたる・なぞく・善政を称す・春秋いづれ・日食を祈・墓所をしめ置）・神祇（伊勢・加茂・春日・大原・住吉・日吉・阿蘇宮・稻荷・熊野・貴船・小野・雨を祈る）

（以上、巻五）

以上の詞書についての叙述の整理から、本書は春部・夏部・秋部・冬部・雑四季部・恋部・賀部・哀傷部・離別部・羈旅〔部〕・雑部のとおり十一の部立に部類され、勅撰集の部立構成とほぼ同じ構成になっていることが知られようが、なかで「羈旅」だけが部立よりも一段低い扱いになっている点と、「雑四季部」を独立させて冬部に連続させている点に多少の異同が指摘されよう。なお、「雑四季」の部立のなかに、「公事」が包含され、さらに「人倫」「書」「絵」「居所」「問尋」など、本来ならば「雑部」に属する内容のものが含まれている点も、少々趣を異にしていると言えようが、この部類方法は『夫木抄』の雑部にみられるそれと近似しているように憶測されるので、本集の部立の構成・組織は、基本的には勅撰集のそれに依拠しながら、『夫木抄』の雑部のそれによって補訂していると推測されようか。

ちなみに、本集は、春部から冬部においては、通常の歌題における内容の提示なっているが、雑四季部・離別部・羈旅〔部〕・雑部などにおいては、『夫木抄』の雑部の部類方法を参考にしながら、さらに細部にわたる内容の提示がなされているのに、恋部・哀傷部においては細部にわたる内容の提示がまったくなされていない点、詞書の内容提示の叙述の方法に統一性を欠くうらみがあると言わねばならない。

ところで、本集に収録されている詞書とはどのような性格のものであるか。この問題を明らかにするために、すでに引用した春部冒頭に示されている「立春」にかかわる詞書のみを、再び掲げてみよう。

。春立ける日よめる

（古今・紀貫之・一）

。 正月一日によみ侍りける

(後拾・小大君・一)

。 みちのくに侍りける時、春立日よみはべりける

(同・光朝法し母・二)

。 題しらず

(新勅・殷富門院大輔・一〇二八)

。 山里に住侍りける比

(風雅・永福門院内侍・一四二三)

これを見ると、勅撰集から引用された詞書の内容は、「題しらず」の場合を除いて（この問題については後述する）、詠歌主体がどのような状況のもとに詠歌したかの点について、具体的に説明した趣になっていると言えるであろう。たとえば、「春立ける日よめる」の詞書には「立春」なる歌題が示されている感じがするけれども、それは詠歌主体が立春という日にこの歌を詠作したという、この詠歌における時間設定としてのみ機能する表現、措辞にしかすぎず、歌題提示としては機能していないのである。換言すれば、本集に採録されている詞書の性格は、なかに歌題とおぼしき詞書が指摘されるにしても、それが「……の心」などと歌題を示す表現形式になっていない限り、それは歌題提示にはなっていないと認識しなければならぬわけである。本集の詞書の内容は、基本的には以上のごとく理解されるべきものである。

それでは、勅撰集の詞書から歌題として採られている場合の内容は、どのような性格を有しているのであるか。この問題については、すでに拙稿「撰集資料としての勅撰集歌——『明題和歌全集』収載の金葉歌の場合——」（『講座平安文学論究』第三輯、昭和六一・七、風間書房。拙著『中世類題集の研究』（平成六・一、和泉書院）所収）で言及したが、ここでは類題集に採られている「立春」なる歌題が、勅撰集の詞書ではどのように表現されているのかを、『二八明題和歌集』で検討してみよう。

そこで『二八明題集』に「立春」の題のもとに掲載されている詠歌をみると、『金葉集』から『続後拾遺集』ま

での十八首が採歌されているので、それらの詠歌に付されていた勅撰集の詞書の内容を、次に示してみよう。

- 。 堀河院の御時百首歌めしけるに、立春の心をよみ侍りける
(金葉・顕季〜肥後・一〜四)
- 。 百首の歌のなかに、はるの心を人にかはりてよめる
(同・前斎宮内侍・五)
- 。 早春のころをよめる
(同・大宰大弼長実・六)
- 。 堀河院の御時百首歌めしけるに、はるたつころをよめる
(詞花・匡房・一)
- 。 はるたつころをよみ侍りける
(新古今・良経・一)
- 。 たつはるのうたとてよみ侍りけり
(新勅撰・俊成・二)
- 。 たつ春の心をよみ侍りける
(続古今・定家・一)
- 。 右大臣に侍りける時、家に百首歌よみ侍りけるに、立春歌
(同・兼実・三)
- 。 春たつ心を
(同・土御門院・四)
- 。 はるたつ心をよみ侍りける
(続拾遺・為家・一)
- 。 堀河院に百首歌たてまつりける時、立春の心をよみ侍りける
(玉葉・俊頼・二)
- 。 春たつころをよみ侍りける
(続千載・定家・一)
- 。 はるたつころをよみ侍りける
(続後拾遺・為世・一)
- 。 立春のうたとてよみ侍りける
(同・為家・三)

以上の勅撰集における詞書の内容を概観すると、「立春の心を」「はるの心を」「立春歌」「立春のうた」のとおりで、要するに、「……の心(こころ)」の形、もしくは直接「(の)歌(うた)」と歌題を明記する形が採られていて、いずれの場合も、「立春」なる歌題としての立場が明瞭に提示された表現、措辞になっている。ここに類題集に歌

題として採用される勅撰集の詞書の叙述形成が明確になり、この点、本集の詞書の叙述形式とはまったく異なっていると認めなければならない。

要するに、本集に採録されている詞書の内容は、一見すると、歌題を明示しているかのように見えるけれども、叙述の形式において本質的に異なっているわけである。となると、歌題を示唆する叙述形式で示された詞書を除外した詞書について概観すると、本集は二十一代集の詞書のほとんどを網羅的に採録しているように憶測されるので、その意味では、本集が二十一代集の詞書のみを対象にした「仮名題」に準ずる類題集としては、かなり充実した内容を有する類題集になっているとということができようであろう。

四 原拠資料と詠歌作者

さて、本集が以上のごとき内容を有する、二十一代集の詞書をほぼ網羅的に蒐集して撰集された類題集であることは、以上の検討によつてほぼ明白になったといえようが、次に、視点を代えて、例歌（証歌）の観点から、この問題について検討を加えてみよう。

次に引用するのは『和歌実践集』春部の「題しらず」のもとに掲載されている『新後撰集』からの抄出歌である。

- 1 さく花の心づからの色をだにみはてぬほどに春風ぞ吹
(同〈新後撰〉・題しらず・範藤・二三〇)
- 2 人とはぬ宿の桜のいかにして風につらくはしられ初けん
(同・同・祝部国長・二三二)
- 3 咲なばと花に頼めし人はこでとふにつらさの春風ぞふく
(同・同・僧正範兼・二三三)
- 4 雨はる、雲のかへしの山風にしづくながらや花のちるらん
(同・同・平時村・二三三)
- 5 散やすき花の心をしればこそ嵐もあだにさそひそめめ
(同・同・中臣資春・二三四)

6 花だにも惜むとはしれ山桜風はこゝろのなき世なりとも

(同・同・よみ人しらず・二三五)

この1～6の六首は注記のとおり『新後撰集』からの採録だが、『新後撰集』をみると、1～5の詠は1250・1253・1255・1257のとおりで、この「題不知」の題下には

7 さけばかつちるもたえまのみえぬかな花より外の色しなれば

(紀叔氏・一二四九)

8 この春も又ちる花をさきだててをしからぬ身の猶のこりつつ

(澄覚法親王・一二五〇)

9 ながらへていければ後の春とだにちぎらぬさきに花ぞちりぬる

(弁内侍・一二五二)

10 みなかみや花の木かげをながれけん桜をさそふ春の川なみ

(平貞時朝臣・一二五六)

11 ちりぬればふくも梢のさびしさに風もや花をおもひいづらむ

(法印雲雅・一二五八)

の7～11の五首がこのほかに掲載されているのだ。このような事例は、具体的な証拠を掲げるのは省略に従うけれども、このほかにもいくつか示しうるのであって、その点からいうと、本集の编者・加藤景範は、勅撰集に掲載の詞書(題知らず)を有するすべての例歌を抄出しているかという点、そうではなくて、自己の設定した選歌基準に照らし合わせて選歌しているという選歌過程が示唆されよう。すなわち、ここには『和歌実践集』に収載される例歌は網羅的に採録されたのではなく、编者の好尚によって選歌されたという本集の編纂意図が示唆されているのである。

ところで、次の

12 我門のをくでのひだにおどろきてむろの刈田に鳴ぞ立なる

(夏・千載・題しらず・よみ人しらず・五三七)

13 伝へ置言のはにこそ残りけれおやのいさめの道芝の露

(冬・新後撰・題しらず・前大納言良教・九〇五)

の12～13の二首は、12が『千載集』の兼昌の詠、13が『新後撰集』の長有の詠だが、作者表記に注記のごとき誤り

が指摘されるのだ。何故に、このような誤謬が認められるのか、その理由を探索してみると、次のごとき理由が憶測されよう。すなわち、この誤記はそれぞれ、12の場合が『千載集』の当該歌の直後の詠、13の場合が『新後撰集』の当該歌の直前の詠の作者を、編者が目移りか何かによって、ついうっかり間違えた結果に基づいていると考慮するのがもつとも説得力を持つようである。ということは、本集が例歌（証歌）採録にあたって撰集資料にしたのは、『二八明題集』や『続五明題集』などの類題集ではなくて、まさに原拠資料である各勅撰集であったことを意味するであろう。

ちなみに、本集が集付を間違つて注記した箇所がままあるので、それらの事例を示し、訂正すると、次のとおりである。なお、紙幅の関係で例歌の掲載は省略に従い、『新編国歌大観』番号を付記しておくことにするが、頭の番号は本集における仮番号である。

- 66 新統古 → 風雅（上西門院兵衛・一九六四）
- 67 同（二条太皇太后宮堀河・一九六五）
- 196 同（新後拾） → 新統古（実方・一四六）
- 216 同（詞花） → 千載（実定・五四）
- 217 同（長家・八二）
- 218 同（能因・九九）
- 219 同（義家・一〇三）
- 266 千載 → 新古今（村上天皇・一六四）
- 267 同（貫之・一六六）

（以上、卷二）

- 670 同(千載) → 新古今(和泉式部・七〇二)
- 671 同(良経・六九八)
- 672 同(隆聖・七〇〇)
- 682 金葉 → 詞花(崇徳院・五〇)
- 692 後撰 → 後拾遺(伊勢大輔・二二三)
- 895 続後撰 → 続後拾(慶融・一〇九三)
- 1463 同(金葉) → 詞花(清昭・三五九)
- 1464 同(良暹・三六一)
- 1465 同(赤染衛門・三六一)
- 1885 同(新古今) → 千載(覚性法親王・一〇〇一)
- 1934 続古今 → 新後撰(行平・五八九)
- 2165 新統古 → 千載(二条太皇太后宮式部・二四二)
- 2230 後拾遺 → 後撰(駿河・一三〇八)
- 2231 同(後拾遺) → 拾遺(如水法師・一〇六三)
- 2320 後撰 → 拾遺(元輔・五〇二)
- 2336 同(新千載) → 新拾遺(伊勢大輔・一四三九)
- 2337 同(政村・一四四二)

それでは、本集の編者は、勅撰二十一代集の詞書を有する詠歌のなかから、いかなる詠歌を抄出したのであろう

(以上、巻五)

(以上、巻二)

(以上、巻三)

(以上、巻四)

(表1) 本集収載の例歌(証歌)の部立別出典一覧表

部立 集名		春	夏	秋	冬	雑 四季	恋	賀	哀 傷	離 別	羈 旅	雑	合 計	採 録 率
1	古今	30	8	48	9	27	7	7	18	12	12	51	229	20.61
2	後撰	46	13	27	3	50	48	8	17	16	3	71	302	21.19
3	拾遺	10	6	12	8	52	18	16	30	21	6	38	217	16.02
4	後拾遺	50	13	33	20	89	32	14	45	24	27	47	394	32.35
5	金葉	12	4	7	3	18	8	3	11	8	1	25	100	15.04
6	詞花	13	5	23	5	12	6	3	11	11	4	10	103	24.82
7	千載	18	5	14	4	18	12	1	41	13	10	20	156	12.11
8	新古今	10	16	21	20	34	7	1	38	17	29	19	212	10.72
9	新勅撰	14	4	7		15	5	2	7	4	5	16	79	5.75
10	続後撰	9	7	6	2	15	5		13	4		21	82	5.94
11	続古今							1	8		2	6	17	0.88
12	続拾遺	8	1			9	2		10			11	41	2.81
13	新後撰	20		2	2	20	2	4	19	10	4	12	95	5.91
14	玉葉	19	1	9	1	16	4	4	7	3	2	22	88	3.14
15	続千載		2		1	7			9	11		2	32	1.50
16	続後拾					1	1	1	7			9	19	1.40
17	風雅	13			2	14	3	4	6			3	45	2.04
18	新千載	4			3	16	6	3	5			7	44	1.86
19	新拾遺	3	1	5		12	2	1	3		2	16	45	2.34
20	新後拾	1	3	1	3	7	1		10	8		5	39	2.51
21	新続古	3		1						6		10	20	0.93
合計		283	89	216	86	432	169	73	315	168	107	421	2359	

か。上部に示した(表1)は、本集に収載される例歌(証歌)の勅撰集における部立別出典一覧表である。

この(表1)をみると、八代集からの採歌率が十三代集からのそれを凌駕している実態を提示しているが、八代集のなかでは、採録率からいって『後拾遺集』が筆頭で、ついで『詞花集』『後撰集』『古今集』が続く、あとは『拾遺集』『金葉集』『千載集』『新古今集』と続いていることが知られよう。また、十三代集のなかでは、『続後撰集』が第一位で、ついで『新後撰集』『新勅撰集』『玉葉集』『続拾遺集』『新後拾遺集』『新

(表2) 雑四季部における細部の出典一覧表

部類 集名		春	夏	秋	冬	公 事	官 職	人 倫	和 歌	書	絵	居 所	問 尋	合 計
		1	古今	1		3	2		2	2	2	2	4	2
2	後撰	4	2	7	8		3	6	1	4	2	3	10	50
3	拾遺	1		3	5	1	3	2	5	4	25	1	2	52
4	後拾遺	2	5	18	2	11	6	6	6	1	15	9	8	89
5	金葉		1			3	2	5	2			4	1	18
6	詞花		1	2			2	1	2	1		2		12
7	千載		1				3		1	2	1	9	1	18
8	新古今			4			3	1	4	2	3	5	12	34
9	新勅撰			2	1		1	2	7	1	1			15
10	続後撰						2		2	6		3	2	15
11	続古今													
12	続拾遺			1			1		7					9
13	新後撰		6	2	1		1		10					20
14	玉葉					1	1		7	3		1	3	16
15	続千載						2		2			3		7
16	続後拾								1					1
17	風雅	1					2		2			3	6	14
18	新千載			2			3	3	7		1			16
19	新拾遺						1		4	3	2	2		12
20	新後拾						1		5			1		7
21	新続古													
合計		10	16	44	19	16	39	28	77	29	54	48	52	432

拾遺集』などが続き、『続古今集』『新続古今集』が最低の採録率となっている。

ちなみに、「雑四季部」と「雑部」における細部の出典一覧表を作成するならば、上部の(表2)と次頁の(表3)のとおりである。

ところで、当代歌壇の大御所であった源経信をさしおいての下命という事情もあつてか、成立当初から種々の非難を受け、『小鯨集』と誹謗されたりもした『後拾遺集』が本集の出典源の筆頭であるのは驚きであるが、それはすでに言及したとおり、本集が、歌題を示唆する以外の表現、措辞で叙述された内容の

(表3) 雑部における細部の出典一覧表

部類 集名		疾 病	懐 旧	述 懐	僧 道	衣 服	飲 食	器 物	雑 物	草 木	鳥 獸 虫	雑 事	神 祇	合 計
1	古 今	2		36	1	3		4		3		2		51
2	後 撰	3		19	3	11		15	1	5	4	10		71
3	拾 遺			2	2	3	5	12	1		4	7	2	38
4	後拾遺	3	1	1	15	4	1	6		7	2	5	2	47
5	金 葉	1		5	3	2	2	7			2		3	25
6	詞 花		2	2						2		3	1	10
7	千 載	2		1	6			7				2	2	20
8	新古今	3	1		3	4		1		2		4	1	19
9	新勅撰	1	1	7	2			2	1	1		1		16
10	続後撰			8	3			2		3			5	21
11	続古今												6	6
12	続拾遺				5			1		3			2	11
13	新後撰		9		1							1	1	12
14	玉 葉	2	2			2	1	8	1	3	1	1	1	22
15	続千載												2	2
16	続後拾	1			1	1		3		1		1	1	9
17	風 雅							2				1		3
18	新千載				2			1				2	2	7
19	新拾遺			1	2		2	2		5	1		3	16
20	新後拾			1	1								3	5
21	新続古			1	3	1	1	4						10
合 計		18	16	84	53	31	12	77	4	35	14	40	37	421

詞書を有するもの、すなわち、人物の関係やその時、その場の状況を重視した記されかたになつている詞書の表記を重視した結果であつて、『詞花集』が第二位の地位をしめているのも『後拾遺集』の詞書の内容に近い叙述方法の詞書が多いのと、『詞花集』が後拾遺集時代の前代歌人を重視している点に起因しているし、『後撰集』が第三位に位置しているのも、まさに三人称で記述された詞書に、人物の関係やその時、その場の状況を重視した書きかたが認められるからである。

要するに、(表1)に示される数値は、詞書からみた各勅撰

集の属性をかなり顕著に物語っているように憶測されるので、以下、部立の視点から各勅撰集の特色について言及してみよう。

まず、四季部のうち、上位に位置するのは、春部については『後拾遺集』『後撰集』『古今集』の順であり、夏部については『新古今集』『後撰集』『後拾遺集』であり、秋部については『古今集』『後拾遺集』『後撰集』であり、冬部については『後拾遺集』『新古今集』となっているが、いずれも特定の勅撰集に偏っている点にその特徴が指摘されよう。

次に、雑四季部については、雑春では『後撰集』が、雑夏では『新後撰集』『後拾遺集』が、雑秋では『後拾遺集』『後撰集』が、雑冬では『後撰集』『拾遺集』が各々、めだっているが、雑秋の『後拾遺集』が突出している。また、公事では『後拾遺集』が他を圧倒しているが、これは同集の雑三―雑五からの抄出歌を主要内容にしている点で、本集の編者の好尚の反映が認められよう。また、官職では『後拾遺集』が、人倫では『後撰集』『後拾遺集』が、比較的上位に位置するが、和歌では『新後撰集』『新勅撰集』『続拾遺集』『玉葉集』『新千載集』など、三代集からの採歌がめだっている。また、書では『続後撰集』がめだち、絵では『拾遺集』と『後拾遺集』が他を圧倒しているが、絵に『拾遺集』からの採録が多いのは、同集に屏風歌の収載量が多いからであろう。また、居所では『後拾遺集』『千載集』がめだつが、問尋では『新古今集』『後撰集』が『後拾遺集』を凌駕している。

次に、人事に関しては、恋部では『後撰集』『後拾遺集』『拾遺集』『千載集』が他を圧倒しているが、就中、『後撰集』がめだつのは、日常的な恋の詠歌が多く、歌物語的な詠作が同集に多いことに起因しているであろう。また、賀部では『拾遺集』『後拾遺集』が、哀傷部では『後拾遺集』『千載集』『新古今集』『拾遺集』が各々、他を圧倒しており、両部とも『古今集』以来の部立の一つであるのに、量的にこのような差異が認められるのは、編者の好

尚による結果であろう。また、離別部では『後拾遺集』『拾遺集』『新古今集』が、羈旅部では『新古今集』『後拾遺集』『古今集』が各々、突出しているが、就中、『新古今集』がめだつのは、新古今時代ごろから現実の旅が増してきたのに相俟って、題詠歌による異空間を旅するという設定が詞書に増えてきたからであろう。

次に、雑部では『後撰集』『古今集』『後拾遺集』『拾遺集』と四代集からの採歌が他を圧倒しているが、これを細部の視点からみてみよう。まず、疾病ではとくに顕著な傾向は窺知できないが、懐旧では『新後撰集』からの採歌がめだっている。また、沈淪や老いの歎きなどの私情を内容とする述懐では、『古今集』と『後撰集』とが他を圧倒しているが、勅撰集では詠作が急増する『新古今集』からの採歌が皆無である点、本集の特徴となっている。また、僧道（いわゆる釈教歌）では、初めて部立として独立した『千載集』を『後拾遺集』が上回っている点に、本集の特色が認められようか。また、衣服では『後撰集』がとくにめだつが、その理由は分明でない。また、飲食では例歌が少ないなかでは『拾遺集』がめだっている。また、器物では『後撰集』『拾遺集』からの採歌がめだっているが、十三代集では『玉葉集』がそれらに続いている。また、雑物・鳥獣虫の例歌は絶対数が少なく、特筆するに足りないが、草木では『後拾遺集』からの採歌がやや勝っている。また、雑事では『後撰集』『拾遺集』からの採歌がややめだつ感じだが、神祇では最低の採録率である『続古今集』からの採歌がめだつ程度で、とくに言及するほどの特徴は認められない。

本集が収載する各勅撰集の出典別収録状況は以上のとおりだが、それでは、それらの勅撰集から、本集にはどのような歌人の詠作が採られているのであろうか。次頁の（表4）は本集に収録される詠歌作者の一覧表である。

この（表4）をみると、本集の収載和歌の二千三百五十九首のうち、五十六・〇パーセントが五首以上の歌人で

しめられている実態が明白になる。具体的にいえば、本集には読人不知の詠が圧倒的多数収載されていることにまず特徴を認めうるが、次いで、貫之をはじめとする伊勢・躬恒・兼輔・友則・遍昭・素性・忠峯などの『古今集』初出歌人が続き、さらに西行をはじめとする俊成・良経・定家などの新古今時代の歌人を間にはさみ、和泉式部・赤染衛門・公任・元輔・能宣・恵慶・実方などの『拾遺集』初出歌人、さらに伊勢大輔・紫式部・能因・道命・兼盛・相模・周防内侍・大弐三位・康資王母・小弁・定頼・花山院・良暹などの『後拾遺集』初出歌人などが陸続するなかに、俊頼・行尊・基俊などの『金葉集』初出歌人が散見されるという収載状況である。要するに、八代集に登場する詠歌作者が、本集の例歌（証歌）の上位に位置する歌人ということになるであろうが、この点、（表1）の本集に収載される出典一覧表の結果をも確認しうる収載状況といえるであろう。

ちなみに、本集に収載される四首以下の詠歌作者は、次のとおりである。

〔四首収載される詠歌作者〕 贈従三位為子・為仲・因香・家隆・匡衡・慶範・兼長・顕昭・顕房・公実・後嵯峨

院・篁・国助・重之・俊子・小将内侍（後深草院）・成仲・清正・宗尊親王・仲正・忠平・忠良・通俊・道

玄・能有・伏見院・蓮生

〔三首収載される詠歌作者〕 伊尹・伊衡・為基・為顕・為氏・為世・為道・為頼・円融院下野（四条太皇太后

宮）・加賀左衛門・家経・閑院・季通・紀伊（祐子内親王家）・堀河（待賢門院）・経衡・月花門院・兼澄・

公忠・光俊・光善・行盛・後三条院・高光・国章・左近（三条院女蔵人）・師輔・資業・滋治・重家・俊忠・

如覚・小侍従・小将井尼・信実・信明・崇徳院・是則・成茂・清少納言・則長・大弐（安嘉門院）・忠盛・朝

範・通具・通親・道因・道真・道性法親王・肥後（京極前関白家）・美作（二条太皇太后宮）・兵衛（上西門

院）・右京大夫（建礼門院）・有仁・頼通・隆衡・隆信・隆弁

〔二首収載される詠歌作者〕 阿仏尼・伊周・為相・為明・惟喬親王・惟明・憶良・下野（後鳥羽院）・花園院・

雅通・雅定・壞円・覚円・関雄・紀式部・基頭・基政・基忠・義壞・義孝・教範・経国・慶暹・兼覽王・顕
網・顕房室・元善・元任・元方・源賢・源心・公教・公衡・公資・甲斐（前斎宮）・甲斐（太皇太后宮）・行

平・幸平・後小松院・後白河院・高遠・高倉（八条院）・高弁・康秀・康貞女・国夏・国行・国平・三条院・

四条中宮・師賢・師光・師実・師尚・師通・師房女・資通・実経・実継・実行・実重・寂昭・修範・俊成女・

駿河・順徳院・諸実・如円・小一条院・小侍従命婦・小大君・小町が姉・少将内侍・承仁法親王・深覚・新少

将・親世・正家・正言・成範・斎信・政村・济時・静賢・静仁法親王・撰津（二条太皇太后宮）・千古・千

里・宗貞・相如・尊氏・大弑（二条太皇太后宮）・泰時・醍醐天皇・中宮内侍・中興・中将尼・仲平・忠快・

忠通・忠定・長国・長济・朝任・通宗・定方・東三条院・棟仲・道家・頼阿・内侍（永福門院）・内侍（前斎

宮）・内侍（中宮）・範兼・批把皇太后・敏行・武蔵・兵衛・弁内侍・輔尹・輔昭・輔仁法親王・木綿四手

（高陽院）・明衡・明子・有仁室・祐春・場子内親王・頼実・頼政・頼朝・頼輔・隆経・連敏

〔一首収載される詠歌作者〕 愛宮・あこ・あるじの女・安貴王・伊家・伊賀少将・伊通・為道・伊望女・依子内

親王・為経・従二位為子・為実・為守・為政・為長・為定・為藤・為道女・為任・惟岳・惟幹・惟規・惟成・

惟济・一条院・一条院皇后宮・宇多院・永胤・永観・永実・栄海・越後（花園左大臣家）・越後（三宮家）・

越前（後三条院）・円嘉・円玄・延光・遠久・翁・乙・かつみの命婦・加賀（待賢門院）加賀少納言・河内

（前斎宮）・家基・家綱・家長・家良・嘉種室・雅縁・雅兼・雅頭・雅康・雅平女・雅有・賀朝・快覚・戒

秀・覚寛・覚助法親王・覚性法親王・覚仁法親王・覚盛・覚宗・覚忠・閑院の御・寛伊・寛尊法親王・観意・

季能・倚平・龜山院・基綱・基長・義家・義行・義国室・義仁法親王・儀同三司母・久世・御形宣旨・共政

室・匡範・教定・玉淵女・近衛院・近衛太皇太后宮・欣子内親王・具氏・具親・空海・堀河（二条太皇太后宮）・堀河院・堀河女御・惠鎮・経円・経家・経重・経乘・経臣・経成・経長・経任・経輔・経房・敬信・景明・景房・慶融・瓊子内親王・潔興・兼家・兼芸・兼好・兼綱・兼材の恋人の母・兼氏・兼実・兼昌・兼俊女・兼宗・兼忠母・兼方・兼明親王・兼覽王母・憲基・顕季・神祇伯顕仲・顕忠母・元夏・元真・元明天皇・元良親王・玄上女・玄範・源惠・源昇・源承・戸々（遊女）・公蔭・公光・公豪・公守・公親・公世・公朝・公澄・公通・公雄・広繩・光源・光嚴院・光孝天皇・光清・光朝・光頼・孝覚・孝標女・行尹・行家・行久・行氏・行成・行濟・行朝・行念・行能・行範・行遍・行明親王・後光嚴院・後朱雀院・後生女・後醍醐院・後二条院・後伏見院・高遠室・高真・高津内親王・高範・康貞女の子・興俊・興信・興風・豪子・国長・国冬・国房・黒主・今道・左京大夫・佐清・齋宮内侍・宰相（選子内親王家）・宰相内侍（後宇多院）・三河（宗尊親王家）・三河（法性寺入道前関白家）・三条町・讃岐（二条院）・氏久・只畝・四条宰相・師尹・師季・師氏・師氏女・師時・師俊・師宗・師長・師房・師明・師頼・資信・資盛・資連・二条院・二条后・侍従（本院）・時雨・時綱・時村・時文・時平・時房・時望室・滋幹女・滋包女・滋応・滋道法親王・式部（二条太皇太后宮）・実・実尹・実基・実教・実経女・実光・実綱・実国・実質・実時・実誓・実冬・実雄・実頼母・守覚法親王・守文・秀能・秋岑・修理・重時・重保・重茂・春風・俊蔭女・俊賢室・俊綱・俊宗女・俊定・駿河（祐子内親王家）・敦行・女・女の母・助信・小左近・小式乳母・小八条御息所・小弁命婦・少将内侍（藻壁門院）・尚侍・承均・承香殿女御・勝臣・勝範・常・上総（堀河院中宮）・上総乳母・浄意・心海・信寂・信生・信専・真願・進子内親王・新宰相（上東門院）・新左衛門・親・親元・親子（内侍）朝臣）・親盛・親清女・親清女妹・仁覚・仁俊・仁祐・西住・成元・成源・成尋・成清・成忠女・成長・成通・成良・成平・清

胤・清蔭・清子（命婦）・清昭・清忠・静仁親王・清範・清和院君・盛少将・盛方・聖・聖武天皇・静縁・静
 巖・瞻西・夕霧（中院右大臣）・節信・千兼女・宣旨（六条斎院）・蟬丸・全性・善・善信・善法母・禪心・
 禪性・漸空・素覺・素暹・宋延・宋縁・宗円・宗興・守氏・宗成・宗通・相方・増覚・尊円・尊道法親王・大
 将御息所・大進（俊子内親王）・大夫（延子内親王家）・大頼・大和宣旨・泰光・達智門院・堪円・知家・致
 経・致平親王・筑前乳母（前斎宮）・仲文・忠家・忠行・忠資・忠能・忠命・長谷雄・長明・長有・鳥羽院・
 朝綱・朝勝・朝忠・澄覚・直幹・通方・通頼・定為・定家母・定雅・定輔・定房・定頼母・貞時・貞俊・貞
 範・土御門院・土御門院御匣殿・土佐・冬嗣・冬信母・冬平・東一条院半物河浪・棟仲・統理・藤三位・道
 雅・道雅女・道覚法親王・道洪・道兼・道綱・道昭・道甚・道平・敦家・敦固親王・敦敏・なびく・内匠（女
 蔵人）・能海・能清・範憲・範光・範藤・白河院・白女・八歳女・八条大宮・繁茂・肥前・備前典侍・扶幹・
 仏国・兵衛（待賢門院）・保昌・輔臣・輔相・法円・邦長・満仲・妙・民部卿典侍（後堀河院）・民部内侍・
 命婦乳母・明日香采女・茂行・有家・有基・有季・有教・有助・有忠・有定・有長・有輔・有祐・祐臣・祐
 親・祐任・融・陽明門院・頼基・頼言・頼孝・頼氏・頼成・頼宗母・陸奥・降国・隆資・隆聖・隆博・隆方・
 隆房・隆祐・旅人・良心・良清・良勢・良珍・良房・琳賢・冷泉院・麗景殿前女御・麗子・列樹・蓮阿・和氏

五 編纂目的・編者・成立の問題など

さて、本集に収載される詠歌の原拠資料と詠歌作者の実態は、以上のごとくであるが、それでは、本集はいかなる目的で編纂されたのであろうか。この問題については、幸甚なことに、編者・加藤景範自身の手になる序文が巻頭に掲載されているので、次にそれを引用してみよう。

やまと哥のふみ、類をもて題の哥集めたるは多かれど、詞書をもてよせたるは、梓にきざめるをいまだみず。定めある題の外に、難波の蘆の何くれと人の世にしげかるふしあるを、作例なき哥にあひては、またことのはの角ぐみそむる際などは、いかなる哥をかとうでんとおもひまどふもあなるに、其例をみむとて、代々の集に家の集等、求め出むとするも、水無瀬川の埋木をありて、ゆく水底に見あらはさむとすばかり、とみの用をなしがたし。初学これをうれふ。さるために、代々の集の詞書なるをあつめ、類を分ちて、実践集と名づけて、かの埋木たづぬるしるべとして、つのごむ蘆のめをたすくるのみ。

寛政辛亥の春

たかさと

これを要するに、真名による結題などの類題集や、仮名題による類題集などは、種々様々世間に流布しているようだが、詞書による類題集はいまだ（編者の）管見に入らない。したがって、ほぼ定型化した結題などの場合はともかく、それらに見られない歌題で詠作しなければならないときに、実際に手本となるべき参考歌が手許にないので、詠作の初心者などは、手当たり次第に勅撰集や諸々の家集などのなかに、しかるべき例歌がないものかと探索するけれども、適当な例歌を見出すことは困難であるようだ。そこで、編者が、これらの、いわば詠作の初心者のために、勅撰集のなから、しかるべき詞書とその例歌（証歌）を蒐集し、部類して「実践集」と命名したのが本集である、ということになるだろうか。

ところで、本集は、序文でみずからが表明した編纂意図を実現、達成するために、実際にどのような作業を行ったかについて、「凡例」で叙述しているので、これについても次に掲載しておきたい。

一 此書は、代々の集より挙る也。此内に、此書を節略して書たる所ま、あり。一字もたしたる事なし。有てまぎらはしく、しみて哥にかゝらぬ事は略す。

一 旧注有ても、解しがたき哥をのせず。

一 題しらずの哥も、実践とみえて、類題集などにもれたるをのす。哥合の哥も、其時の事情、わが身の述懐などの哥は、実践なれば載る有。

一 詞書は、すべて集を選べる人、其ことはりを書て、みかどへ奏覧するなり。されば、みづからの事書に、用ゐるがたき事あり。たとへば、何々としてよめるといふは、よみけるといふを、つゞめたる詞なれば、我哥にも書べき詞なれども、よめるといへば、人の読たるをいふに、いひなれたれば、わが哥にはよみ待ると書がよし。又人をとふて、主の宿にゐぬを、侍らざりければと書る有。是も、我人をとひしに、宿にあらで、後に其主へ贈る哥の詞書に、侍らざりければとは書がたし。おはさざりければと書べし。此類推て心得あるべし。

一 世俗の元服といふは、貴人の成人の、冠服くわんぷくをめさるゝをかりて、いふなり。貴人はこむらさき、初もとゆひなどよみ給へれど、庶人しよじんは、紫はよむべからず。初もと結はよみてもよし。又男女の袴着、かづきぞめなど、貴人の家になき事なれば、其哥とはなし。貴人に、裳着もぎといふ事あり。それも、哥に裳着とよめる事みえず。只行末を祝ふ心をよみ、或は、鶴・亀・松・竹、又時につけて、桜・桃・菊など、祝ふ心のよみそへらるべき物にてよめるが多し。其例にならふべきなり。

ここには五箇条にわたつて、本集の編纂方針およびその実践、詞書における記述内容の把握の仕方、和歌を詠作する作者の属する階層（帰属と庶民）によって用語に差異のあることなどの点について言及されている。すなわち、第一は、本集に抄出されている詞書の記述方法についての言及であり、第二は、本集に収載する和歌の収載基準についての内容であり、第三は、本集に収録した「題しらず」歌についての収録基準と、歌合歌についてのそれに言

及したものであって、この部分は本集に収載した詞書と例歌の収載基準について言及されている。

これに対して、第四は、詞書の記載内容には撰者の定められた記載方針による修正が施されていることを指摘した内容であり、第五は、詠作された和歌の用語には詠作者の属する階層による差異があることや、特定の景物によつてある特定の意味合いを象徴させる詠みかたがあることなどに言及したものであって、この部分は詞書や和歌の内容についての理解の仕方に及んでいる。

このうち、歌合歌の場合とはかく、本集収載の「題しらず」歌に言及するならば、おおよそ次のとおりである。ただし、本集が「題しらず」歌としているもののうち、

14 かへりこぬ昔を今と思ひねの夢の枕の匂ふたちばな

(橘・式子内親王・三四五)

15 橘の花ちる軒のしのぶ草むかしをかけて露ぞこぼる、

(同・忠良・三四六)

の14・15の二首はともに『新古今集』に収載され(二四〇・二四一)、詞書には「百首歌たてまつりし時、夏歌」とあって、「題しらず」とはなっていないので、除外した。まず、題しらず歌の出典については、『古今集』から『新

(表5) 「題しらず」歌の出典一覧表

集名	歌数	集名	歌数	集名	歌数
古今集	55首	新古今集	47首	新千載集	1首
後撰集	28首	新勅撰集	12首	新拾遺集	12首
拾遺集	15首	続後撰集	8首	新後拾遺集	8首
後拾遺集	12首	続古今集	3首	新続古今集	1首
詞花集	12首	新後撰集	27首	合計	二百五十八首
千載集	16首	続後拾遺集	1首		

続古今集』の勅撰集から二百五十八首が抄出されている(ただし、五勅撰集からは未収録)ので、その詳細を具体的に紹介すれば、上部の(表5)のごとくである。

この(表5)によれば、本集収載の題しらず歌は、『古今集』からの採歌が首位であつて、次に『新古今集』が続き、さらに『後撰集』と『新後

撰集』がそれに続き、次いで『千載集』と『拾遺集』が続き、さらに『後拾遺集』『詞花集』『新勅撰集』『新拾遺集』が続くという収載状況であるが、この場合も、八代集からの採歌がその大半をしめ、十三代集では『新後撰集』、『新勅撰集』『新拾遺集』がめだつという程度である。

次に、題しらず歌の詠歌作者については、読人不知が八十九首で、全体の三十四・五パーセントをしめている。次いで、貫之が八首、和泉式部と西行が各七首、好忠と俊成が各五首、式子内親王と良経が各四首、人麻呂・伊勢・大輔（殷富門院）・家隆が各三首のとおりであって、二首以下の収載歌人は、次のとおりである。

〔二首収載歌人〕 基頭・匡房・紫式部・慈円・寂蓮・小町・相模・通具・道濟

〔一首収載歌人〕 安貴王・伊家・伊勢大輔・為家・為藤・為道・惟成・遠久・下野・花山院・家長・嘉言・雅縁・快覚・関雄・基俊・躬恒・御形宣旨・具親・経家・慶範・慶融・月花門院・兼氏・兼昌・兼盛・兼宗・元善・公朝・行尹・行久・行念・孝覚・後嵯峨院・高倉（八条院）・康資王母・興信・国夏・国長・国平・齋宮女御・只暇・師光・時綱・時村・実伊・実経・実時・重保・重茂・俊成女・俊頼・如円・小侍従・小町が姉・信実・信明・進子内親王・成仲・成通・政村・政平・清輔・盛方・蟬丸・素性・宗円・宗氏・増基・尊氏・泰光・泰時・大弐三位・忠能・忠平・長能・長有・朝勝・澄覚・通宗・定雅・道因・道信・道甚・道性法親王・道命・範兼・範藤・輔親・輔仁親王・友則・有仁・祐親・頼宗母・頼輔・隆衡・隆聖・隆祐

この整理によつて、題しらず歌の詠歌作者の場合、読人不知が多いのは言うまでもなからうが、それを除くと、やはり八代集の歌人がそのほとんどをしめている実態が明らかになり、本集の編者の編纂意図と合致することが知られよう。

以上から、本集の編纂目的に言及するならば、本集は、編者・加藤景範が、詠作の初心者即戦力に役立つべく、

勅撰二十一代集のなかから、しかるべき適当な内容をもった詞書とその例歌、および通例の類題集には未収載の「題しらず」歌、ならびに述懐性の強い歌合歌などを撰集対象にして選歌して、みずからの撰集意図に従って部類した、いわば詞書の作例集と規定できるのではなからうか。

なお、景範の師匠にあたる有賀長伯の『和歌八重垣』に、「七 詞書の哥の事」として、当面の問題について言及しているので、架蔵の版本（明和五年刊行）によって紹介しておこう。

七 詞書の哥の事

詞書の哥は、題の哥とはいさゝか心持かはれり。しかる故は、題の哥は題の上に合せて、題をそらさぬやうによむ也。詞書はその哥の子細を詞に書て、哥の心を詞書にゆづり、又は哥の心を詞書にてたすくるやうにする也。ただし、それも詞書の中に題あるは、題の哥の詠格也。「詞書の中に題あるとは、たとへば、新古今に「詞をつくらせて、哥に合せ侍しに、水郷春望といふことを」、かやうのたぐひ也」詞書の哥とは、たゞその哥の故を詞に書たる也。さて、又詞書には「梅花」とありて、哥には「花」とばかり読るたぐひ多し。たとへば、新古今に、

二月まで梅花咲侍らざりける年、読侍りける 中務

知らめやかすみの空を詠つ、花も匂はぬはるをなげくと

是、詞書には「梅」とありて、哥には「花」とばかりあり。又、古今集

やよひのつごもりの日、雨のふりけるに、

藤の花を折て人につかはしける なりひらの朝臣

ぬれつゝ、ぞしみて折つる年の内に春はいくかもあらじと思へば

是、詞には「藤の花」とありて、哥には雨も藤花もなく、「ぬれつゝぞ」といふに、雨をもたせ、「折つる」に、藤花をもたせたり。これを、詞書にゆづるといふ。是、則、詞書の哥の一躰也。されど、初心の哥にかやうに読んてせば、一首ぬけがらになりて、落着しがたき哥になるべし。よくよく心つくべきこと也。此外時にとりての則興・景望の哥、人の許につかはす哥などの、題にてよまぬ哥はみな詞書たるべし。尤、其時の興・景気が則、題ながら、なに／＼と題をさだめて詠るとはことかはるべし。すべて初心の詞書は哥に読べき趣向をこと／＼く書あらはせるゆへに、哥は詞書の再釈のやうに聞え、詮なきことになる也。よくよく心づかひすべき也。

ちなみに、編者の加藤景範については、最新情報では、鈴木淳氏によつて、『日本古典文学大事典』（平成一〇・六、明治書院）に、

加藤景範かとうか 歌人・和学者。通称友輔。字子常。号竹里。享保五年（一七二〇）～寛政八年（一七九六）一〇月一〇日。七七歳。大阪の売薬商で、屋号小川屋喜太郎。父信成の感化を受けて、早くから和歌に親しみ、長じて中井竹山、三宅春楼等と協力して懷徳堂の学事に尽くした。歌は有賀長伯の師承に与し、地下二条派の宗匠として京阪に大きな勢力をなしたが、安永四年（一七七五）に公刊し、住吉大社に奉納した私撰集『蔵山集』は、その私意について小沢蘆庵から批難を浴びる。著述は『名所ついまつ』『和歌虚詞考』など初学者向け通俗学書を数多く手懸けたほか、『何世話』『かはしまものがたり』『問思随筆』等多岐にわたる。

と紹介されているが、多治比郁夫氏「加藤景範―懷徳堂の歌人―」（『大阪府立図書館紀要』第八号、昭和四七・三）に詳細な言及がなされているので、景範の伝記的事蹟についてはこれ以上触れないことにしたい。

ただし、景範の和歌関係の事蹟についてのみ『国書総目録著者別索引』（昭和五一・一一、岩波書店）から摘記すると、

景範は『閑吟羈旅百首』『秋霜集』『証歌集』『新題百首』『奉納月次百首』『明和辛卯十月冷泉入道の君為村卿に奉る歌并詞書』『六吟百首和歌』（寛政四）『和歌虚詞考』（寛政元刊）『和歌三類集』（安永六刊）『和歌実践集編』（寛政七刊）『和歌浜裏』（安永六刊）『和歌美那礼棹』『和歌用字集』『和歌和文集』などの多くの著作を拾うことができる。

ちなみに、多治比氏が前掲論文で、景範の和歌活動に触れて、橘南溪の『北窓瑣談』に「浪花の加藤景範は、和歌の上手にて歌文のも委し、とて、京都にても賞讃する人なり。近年は色々の歌書著述も多し。此頃、余、彼人の著述の和歌浜土産といふものを見しに、初心の人、和歌の会などに携ふるに重宝有益の書なり」なる記事を紹介されているのは参考になろう。ここには江戸中期以降の大阪で、和歌活動において有賀長伯の師説を継承して、地下二条派の宗匠として面目躍如たる景範の活躍ぶりが活写されていて興味深い。

ところで、『和歌実践集』の成立については、景範自信が、その序文に「寛政辛亥の春 たかさと」なる序文執筆時期と自署を明記していることから、また、刊記に「寛政七年乙卯七月発行／浪華書肆／岩崎徳左衛門・加藤源蔵・加藤清右衛門」とあることからみて、本集の成立は寛政三年（一七九二）の春、刊行年月は同七年（一七九五）七月ということになろうか。

となると、寛政七年七月に刊行された本集は、近世類題集の成立史のなかでどのような位相にあるであろうか。この点について結論めいたことをいうならば、本集は極論すれば勅撰集（二十一代集）の詞書による作例集と規定できようから、そのような性格を有する類題集の誕生がそれ以前に指摘しえない事実から、詞書による類題集の嚆矢と位置づけることができるであろう。

ちなみに、本集と類似する内容をもつ、いわゆる「仮名題」による類題集である高井八穂編『古詞類題和歌集』の刊行が文化十四年（一八一七）、聴雨庵蓮阿編『仮名類題和歌集』の刊行が文政元年（一八一八）、石津亮澄編

『屏風絵題和歌集』の刊行が文政三年（一八二〇）である経緯をみると、本集がいかにかこの種の類題集のなかでいちやく刊行されているかが理解できるであろう。ここには、編者の加藤景範が和歌の入門書を刊行するに際して、どのような種類の歌書を供給すれば初心者の要請に応えうるかという、いわば経営面における先見の明のあったことが指摘されようか。『和歌実践集』の成立の意義は、おおよそこのような点に認めうるであろう。

六 付録の紹介

最後に、本集は巻末に、詞の選びかたから短冊・奉書の書きかたまで、いわば詞書についての実践的な諸心得を記した「初学に示す詞書の心得」を付録として掲げているので、次にそれらの記事を引用しておこう。

初学に示す詞書の心得

一 惣て詞書は、詞をかざらず、こと短かに、事のわけよく聞ゆるを、むねとし、（詞書ニテモ小序トモイフホドニ長キハ守備に枕詞ナドアルモヨシ）哥にて聞えたる事を、詞書に書ぬやうにすべし、とあるやごとなき御方の、仰られし。げに、詞書にて哥の心残りなく聞えたるは、無下に拙し。ある人の詠草に、「詞書」思ふどち、野山の花を、見ありきけるに俄に雨ふり出ければ、あたりのあばらやに、暫立より、雨を過す程、思ひつゝ侍る

むらさめにおくある花をわけかねてしばし休らふ山の下廬

是は、詞書にて、よく聞えたり。哥の心とて別にはなし。哥はなくてもよかるべし、といひければ、明の日又、「詞書」思ふどち花を見ありきて

おくまではまだわけやらでむらさめにあらぬ陰とふ花の山ぶみ

と改めてみせられし。是にて詞書もたち、哥は哥の風情有てよし。是にて初学の人、詞書の書かたを、こゝるえらるべし。

一 此篇に載る所、皆天子へ奏覧の書なれば、貴人名望ナダカキの人の事をも、引下げて書る事多し。たとへば、その君のとひ給へるとあるべきを、とひけるにと書るたぐひ也。又我哥の詞書によめると書べからず。よみ侍ると書べし。

一 詞書の哥を人々に贈るには、短冊ならば、上を三四分計あげ、下は哥の頭字との間も三分計あけて、五行迄は書べし。五行にも余らば、奉書小たかの類に書べし。奉書ならば、詞書を、奉書の端二寸計あげ、上一寸五分計あけて書べし。哥は詞書より少し上ゲ、短冊の如く、上句下句の頭字を、揃へて書べし。(二行)墨つぎは、短冊に同じ。親しく交らふ中ならば、四行か五行七行に散して書もよし。上包は美濃紙にて、上書は、年賀ならば、賀詞、寿詞、又は、賀ニスルヒシ幾首と書もよし。下に、わが名乗を書。貴人へ贈るは、賀の字の上に、奉の字を添べし。わが名の上に、わが姓氏を書べし。婦人は、我名計を下に書べし。上には何ともか、ぬがよし。

一 産室へ贈る、祝の哥の上包には、生子ムマレタルコ男ならば、賀ニスロウシヤウ弄璋ヲ、(又生珠トモ)女ならば、弄瓦ロウガハ(又は夢蘭トモ)書てもよし。是も婦人は書ぬがよし。

一 世俗にいふ、小児の髪置、袴着、被初などは、高貴の御家になき名目なれば、其哥とは、撰集家集にもみえず。されど、鄙野ヒヤにもあらず。わけの立たる名なれば、詞書には書てもあしからず。哥は鶴亀松竹などに寄て、祝のこゝろよむべし。元服も同じ。(元服ハ貴人ナラデハナキコト也。今下ニテ云元服ハ文字ノ義ニハカナハネドモ、久シクイヒナラハシキタルコトナレバ、上ニテノ名目ヲカリテ云モトガアルマジ)

一 人の婚姻を賀するには、何がしのぬしの、婚儀を（婚娶トモ）賀し侍りてと、詞書すべし。上包には、賀ニ
 某君ノ（サキノ人ノ字カ号カヲ書）成婚ニヲ（鄙詞トカ和哥トカ）書べし。子の婚礼を賀して、其父へくる
 には、賀ニス何氏ノ令嗣ノ婚娶ニヲと書。女の嫁せるを、其父へ贈るには、閨愛（閨秀トモ）の、結婚と書べし。
 此外、賀にも悼にも、俗に通じがたき漢語は、書ぬがよし。賀詞、悼詞、と計書てもよし。

一 宅がへを賀するには、上に賀ニト居ニヲとか加ニ移居ニヲとか書べし。（俗ニ変宅ト云、決シテ書ベカラズ）新
 に修理して移るには賀新居と書もよし。

一 他所へ行人に贈るには、上に送別と書。行人の残し置返哥には、留別と書べし。

一 人の剃髪を賀して、哥を贈る人有。世事をのがれて、行末長かれと祝ふはことほり也。剃髪は、祝ふ事には
 あらず。盛年のさまを、僧形にかふるなれば、いまはしき事にて、昔は嘆きし事也。物語にもみえたり。考へ
 みるべし。

一 木草の花を人に贈るに、哥を添るには、詞書に、庭の梅初て咲ければ、おりてまいらすととか、又は何か
 たへまかりしに、何の花豊也しを、みてのみやはとて、（是ハフミノ末ニ書カ、又常体ニ詠草ニ書テソフルモ
 ヨシ）又短冊に哥を書いて、直に枝に結び付るもよし。短冊を豎に二ツに折、それを又豎に二ツに折、（ハ、四
 分計ニナル）それを、枝ある物は枝、葉計の物は、葉を一ツ下に置、其上に右四ツ折の短冊を、真結びに一ツ
 結付べし。又短冊を其儘にて、詞書にかゝらぬ様に、上にあなをあげ、水引を通し、結付てもよし。

* 「四ツ折短冊付やう如此」の絵（省略）、「又短冊不折に其まゝにても結付ける事あり如此」の絵（省略）

ここには十項目にわたって、詞書についての諸心得と、その詞書を記した詠歌を他人に贈る際の、短冊、奉書の
 書きかたおよび上包の書きかたについて、具体的に記されているが、紙幅を大量に超過したいまは、それらについ

ての要約はここでは一切省略に従いたいと思う。

七 ま と め

以上、『和歌実践集』の成立の問題について、種々様々な視点から検討を加えてきたが、ここでそれらの検討のすえ得られた結果を、次に摘記して、本稿の結論に代えたいと思う。

- (1) 『和歌実践集』の伝本は、刈谷市中央図書館・国会図書館・宮内庁書陵部などに伝存する寛政七年版行の版本が唯一のテキストである。
- (2) 本集は巻一（春部・夏部・秋部）五百八十八首、巻二（冬部・雑四季部）五百十八首、巻三（恋部・賀部・哀傷部）五百五十八首、巻四（離別部・羈旅部）二百七十五首、巻五（雑部）四百二十一首の都合二千三百五十九首を収載する類題集である。
- (3) 歌題は通常の類題集とは異なって、詞書のほとんどすべてを抄出したものに、「題しらず」とするものが添加されている。
- (4) 本集の出典資料は勅撰二十一代集であって、八代集からの採歌が十三代集からのそれを凌駕しているが、八代集では『後拾遺集』『詞花集』『後撰集』『古今集』などが、十三代集では『続後撰集』『新後撰集』『新勅撰集』『玉葉集』『続拾遺集』などが各々、採録率の高い歌集となっている。
- (5) 本集の採録歌人のうち、二十首以上の詠歌作者は、読人不知・紀貫之・西行・和泉式部・伊勢・凡河内躬恒・赤染衛門・藤原公任・清原元輔・大中臣能宣・伊勢大輔・紫式部・能因・藤原俊成のとおりである。
- (6) 「題しらず」歌は二百五十八首に及び、八代集からの採歌が大半をしめるが、そのなかでは『古今集』

と『新古今集』とが突出している。

(7) 編者の加藤景範は有賀長伯の師承の歌人であるが、江戸中期以降の京阪において地下二条派の宗匠として活躍した人物である。

(8) 本集の成立は寛政三年（一七九一）の春であるが、その刊行は寛政七年（一七九五）七月である。

(9) 本集は、編者加藤景範が晩年に数多く出版した和歌入門書のひとつであって、その編纂目的は、詠草の初心者に、勅撰二十一代集にみえるしかるべき適当な詞書とその例歌（証歌）、および題しらず歌を示すことによって、詠作する際の手本とするところにあつた、ということができようか。

(10) 卷末に、詞書についての諸心得を具体的に記した「初学に示す詞書の心得」を掲載している。

(11) 本集の近世類題集史における位相に言及するならば、高井八穂編『古詞類題和歌集』、聴雨庵蓮阿編『仮名類題和歌集』、石津亮澄編『屏風絵題和歌集』などの、いわゆる「仮名題」による類題集が流行するに先立つ、いわば詞書による類題集の嚆矢と位置づけられるであろうか。